# びわこの考湖学

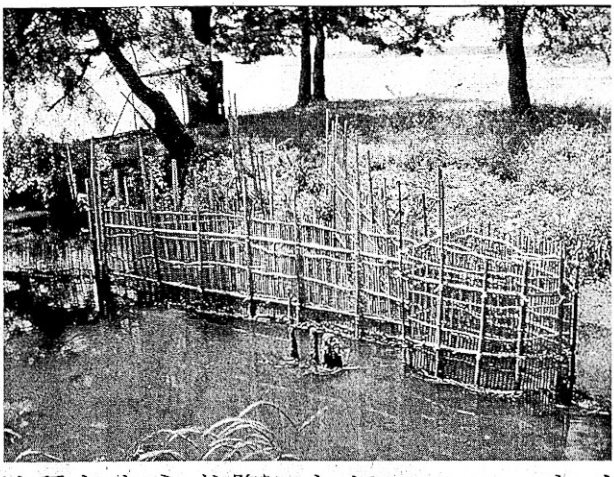
—第3部—

18

## 水田漁業

# 田んぼが魚を呼び寄せた？

この連載で、さまざまな漁法を紹介させていただきました。その中で、水田や、水路で使う漁具・漁法がたくさんあることにお気づきになられたでしょうか。モンドリなどの陥穽漁具や、ドジョウフミ、フセカゴなどです。これらの多くの種類の漁具は、水田とこれを取り巻く水環境が、大変優れた漁場であることを物語っています。水田を中心とした漁業を「水田漁業」といい、この技術は、稲作技術とともに、日本に伝わってきたものと考えられます。



簀（す）などで魚の通り道をふさぐ魞（えり）漁。写真はカワエリ

では、なぜ、水田が漁場となったのでしょうか？このわけを知るためには、弥生時代の琵琶湖にタイムスリップする必要があります。弥生時代は、米作りを始めた時代です。水田を開発するには、水の豊かな平地が適しています。そのため、近江では琵琶湖の周辺の低湿地から水田開発が始まったと考えられます。水田には用水路と排水路が必要です。排水路は当然琵琶湖に繋がります。こうして造った湖辺の水田で稲作を始めたとき、何が起きたでしょうか？その時、弥生人たちは予期せぬ光景を見ました。それは、産卵のために水路を遡り、水田で産卵をする鯉や鮒の大群です。つまり、縄文時代までは、湖岸までしか産卵にこなかった魚たちが、水田開発を通して、人間の近くまでわざわざ来てくれるようになったのです。魚にとっても、水田の出現はありがたいことでした。水田は水深の浅い池です。そして、水田に肥料も入れるでしょうから、水温が上がり、プランクトンが大発生します。このプランクトンは、田んぼで生まれた魚の稚魚には絶好の餌となります。そして水深が浅いため、ナマズなどの肉食魚があまりいません。稲が育つと、これがシェルターとなって、鷺などの外敵から守ってくれます。まさに田んぼは、魚のゆりかごなのです。「田んぼが魚を呼び寄せてくれる！」それならば、魚が遡ってくる水路に「罠」を仕掛けたら、魚が勝手に入ってくれるのでは？こう考えた弥生人が採用したのが、川にかける魞やモンドリなどの陥穽漁具、そして田んぼに入った魚を捕るフセカゴなどの漁具だったのです。網漁を紹介したとき「縄文時代に盛んだった網漁が、なぜか弥生時代には廃れてしまった」ということも紹介しました。この原因は、この水田漁業にあったのです。魚が自らやって来るなら、無理をして琵琶湖に出て網を使って捕る必要はない。田んぼで魚を捕ればいい。ということになったのでしょう。おまけに水田漁業の漁具は、魚が漁具に入るのを待って捕るものが多いことも特徴です。つまり、農作業と同時並行で魚捕りができるのです。弥生時代は水田農民の比率が増えた時代です。農作業をしながら魚が捕れる。なんとありがたいことではありませんか。この2千年以上も前に生まれた、水田耕作と魚捕りのコラボの文化が、連綿と受け継がれ、現代に至っているのです。

（滋賀県立安土城考古学博物館　大沼芳幸）